

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2015

課題番号：26590021

研究課題名(和文) 尖閣諸島問題の外交史的検討

研究課題名(英文) A analysis of diplomatic history on the territorial disputes of Senkaku/Diaoyu Is.

研究代表者

川島 真 (KAWASHIMA, Shin)

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号：90301861

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は尖閣諸島問題、とりわけその形成過程を外交史的に検討することを課題とした。本研究で明らかになったのは、この問題が単に資源開発問題でなく、沖縄返還問題、米中接近(および国連代表権問題)、日中国交正常化などと密接に関わった問題であり、また日本国内でも東京と那覇、そして石垣島など各々に利益がある。このような多元的で多層的な空間からこの問題が発生した。この点を踏まえた論文集を公刊することで成果を世に問いたい。

研究成果の概要(英文)：This project explores the diplomatic history on the disputes of Senkaku/Diaoyu Is., especially focusing on the formation of this disputes itself. The purpose of this project is to grasp how the disputes formed with multi-lateral aspects. I collected some kinds of materials in Taiwan, PRC, ROC, and USA, and checked several kinds of domestic materials, like materials in Okinawa prefecture and Ishigaki local government and its town council. On the interpretation of those materials, this project has temporal image of this issue. This disputes were formed with the complex context, reversion of Okinawa to Japan, US approaches to China, Sino-Japanese normalization and ECAFE's investigation of natural resources.

This project plans to publish a book which shows each aspects on this complex issue. The author includes scholars whose specializations are Japanese diplomatic history, Chinese diplomatic history, US diplomatic history and so on.

研究分野：アジア政治外交史、中国外交史、日中関係史、日台関係史、台湾政治外交史

キーワード：尖閣諸島 主権と領土 ECAFE 台湾漁民 沖縄返還 国際研究者交流

## 1. 研究開始当初の背景

尖閣諸島をめぐるさまざまな言論があるが、学術的なものは決して多くない。外交史的にこの問題を扱おうとした先駆的な研究である任天豪「從《外交部檔案》看釣魚臺「問題」之由來 1968-1970」(『冷戰與臺海危機』台北：國立政治大學歷史學系、2010年)同「釣魚臺問題探因：1968年金吉隆廿號及其衍生事件」(周惠民主編『近代中國的中外衝突與肆應』台北：政大出版社、2015年)は、台湾で公開されている外交文書に依拠した研究であり、この問題の「歴史化」を目指した嚆矢である。だが、台湾の外交文書以外の史料は十分に使用されておらず、他国の文書も用いられていない。また日本では、主にアメリカの文書を使用した矢吹晋『尖閣衝突は沖縄返還に始まる—日米中三角関係の頂点としての尖閣—』(花伝社、2013年)があるが、台湾側の史料の内容読解に課題を残していることなどがあり、外交史的には十分な検討がなされているとはいえない。

筆者も既に、KAWASHIMA, Shin, "The Origins of the Senkaku/Diaoyu Islands Issue: The period before normalization of diplomatic relations between Japan and China in 1972," *Asia-Pacific Review*, Vol. 20, No. 2, 2013, pp.122-145. をはじめ、「尖閣諸島をめぐる言説と歴史」(『IIPS QUARTERLY』4-3, 2013年8月、pp.2-3)、「鳥の卵を追う漁民の海から国家のひしめく海へ—東シナ海の島々」([中国のフロンティア11]『UP』485号、2013年3月、45-55頁)などとして、この問題について書き、また口頭報告でも、国際政治学会で「中国をとりまく『境界』と『国家』—金門島と尖閣諸島を事例に」などとして議論してきたが、それらは任天豪の研究に蒋介石日記を加えたものであったり、あるいは史料の収集過程で記したエッセイであったりするものに過ぎない。そうした点で、この問題の包括的研究をおこなっていくことを構想するに至った。

## 2. 研究の目的

(1) 尖閣諸島が日本と台湾の間で明確に「問題」となったのは1971年であるが、その問題としての形成過程を解明する。日中国交正常化以後は、暫時対象に含めない。この問題の形成過程全体を明らかにするには、ECAFの調査をはじめとする資源問題のみならず、台湾漁民問題、大陸棚条約発効、沖縄返還交渉、米中接近、日華断交(日中国交正常化)などこの問題の関係性を、主に台湾、アメリカ、日本、さらには沖縄(琉球政府)中華人民共和国の文書から解明しなければならない。また、たとえば台湾に於いて資源問題に拘泥してこの島の主権を主張すべきとしたのが、当初、外交部ではなく経済部であり、また尖閣諸島に頻りに上陸していた台湾漁民をめぐる問題を管轄していた組織には、外交部だけでなく、台湾省政府や宜蘭県政府、

台北県政府などの地方級の官庁もあったことに鑑みれば、外交文書以外の史料が重要となることになる。このほか蒋介石日記など、この問題に関わった政治家や軍人の個人文書がある。筆者が試みたいと考えているのは、このような現在の段階で利用可能な史料を包括的に分析して、この問題がいかにして国際的な「問題」となったのか、ということの解明することにある。

(2) 一般に国際紛争や領土問題の研究はその問題の敏感さから研究課題になりにくいことが多い。また日本の外交文書の公開の遅れから、重要な課題が研究されないことも少なくない。だが、外交文書が多様な国々で公開されている現在、現在進行中の問題であっても、それを学術研究の対象として問題形成過程を解明することにより、「領土問題」と言われるものがいかに形成され、何が「解決」を難しくしていくのかという、より高次の課題設定をおこなっていく上での、ケーススタディとして学界に供していくことが可能となる。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究は、台湾、アメリカ、日本、中国、沖縄の文書館を中心にして、19世紀後半+20世紀前半、(日清戦争前後)、1945-1952年(日本敗戦からサンフランシスコ講和、日華平和条約締結期)、1950-60年代(台湾漁民上陸問題)、1968-1972年(資源問題、沖縄返還、米中接近、日中国交正常化)に分けて分析、成果発表をおこなう。収集すべき文書は各国の外交文書、経済・資源担当部局の文書、漁業関連文書、指導者の文書などであるが、時期的にはこの問題が急速に「問題」となったの時期に重点をおく。

(2) 本研究がとる方法は基本的に外交史におけるマルチアーカイブ・アプローチである。だが、直近の出来事であるだけに文書だけで解明できることには限界がある。個人文書、新聞、また必要に応じてインタビューをおこなって、それを補う。

(3) 初年度は、2014年夏に台湾の中央研究院やスタンフォード大学で調査、資料収集を、2015年2月には石垣市にて調査をおこなった。第二年度は国内では北海道大学、京都大学や外務省外交史料館等で史料調査を、国外では台湾の中央研究院で調査、資料収集をおこなった。

## 4. 研究成果

(1) 初年度は川島真「尖閣諸島問題の形成過程—日中国交正常化以前」(『IIPS Quarterly』5-2, 2014年4月、4-5頁)「再び『尖閣国有化』を考える」(『中央公論』2014年4月、16-17頁)「中台関係と日本—その歴史から振り返る」(『治安フォーラム』2014年6月号、51-59頁)「第一章 中国の国境・境界認識」(日本国際問題研究所編『中国をめぐる国境交渉—北京の眼、相手国の眼』同研

究所、2014年、3-8頁)を発表し、尖閣諸島問題の形成過程だけでなく、中国側の領土観などについても検討してきた。また、口頭発表としては、「尖閣列島/釣魚台列嶼問題的な形成過程—從19世紀末到1970年代初」(「多元視野下的釣魚問題新論」、2014年4月17-18日、於：中央研究院近代史研究所)や「中華民國外交檔案から見る尖閣諸島問題の形成」(日台有識者セミナー、於：東京大学駒場キャンパス、2015年2月5日)など、国際学会や研究会において尖閣諸島問題の形成について報告をするとともに、内外の研究者との対話を進めた。これは実証研究にともなう対話の可能性を模索するものであった。

(2) 第二年度は、現実社会で東シナ海問題が南シナ海問題に強くリンクする中で、現実には生じている事象を見据えながら、歴史研究としての本研究を進めていくことになった。

『『帝国』としての中国—20世紀における冊封・朝貢認識と『中国』の境界』(宇山智彦編著『ユーラシア近代帝国と現代世界』ミネルヴァ書房、2016年、219-236頁)では、尖閣諸島問題を琉球問題の観点から捉え、「中華民國外交檔案所見の日華断交—以椎名悦三郎訪台前提条件为中心」では、沖縄返還問題、日中国交正常化、米中関係、資源開発問題が複雑に絡む中で尖閣諸島問題が形成されたことを指摘した。また、「メディア・歴史認識・国民感情」(川島真編著『チャイナ・リスク』(岩波書店、2015年、285-307頁)では現在の歴史認識問題としての尖閣諸島問題を検討している。他方、口頭報告では、Internationalism & Nationalism on modern and contemporary Chinese Diplomacy : Tribute system, Revolution and War, Major Theme 1 China from Global Perspectives, Organizers (世界歴史学会)などにおいて、中国の歴史観、そこに関連づけられた主権意識、それと海洋進出の系譜などについて言及した。このほかにも、国際学会などに積極的に参加・報告し、尖閣諸島問題について内外の研究者とも積極的に意見交換、情報交換をおこなうとともに、この2年間の集大成の報告となる「尖閣諸島問題の外交史的検討」(第四回東シナ海問題研究会)を発表した。今後、内外の研究者とともに論文集を公刊することが決まっている(東大出版会から内諾を得ている)。

(3) 本研究では19世紀の日清戦争前後のこの島をめぐる状況を起点とし、日本の敗戦からサンフランシスコ講和会議、日華平和条約前後において、すでにこの島を「南西諸島」の一部としようと日本が積極的に対米交渉をおこなっただけでなく、中華民国も中華人民共和国の一部の官僚が既にこの島に注目していたことなどを外交文書から指摘した。また、1950-60年代には非常に多くの台湾の漁民がこの島に上陸し、鳥の卵を採取したりしており、米軍が彼らを捉えて送還することもしばしばだった。本研究はそのようなアメリカ

と台湾の間のやりとりも明らかとした。そして、1960年代後半に大陸棚条約が発効し、ECAFにより周辺海域での石油の埋蔵の可能性が指摘されると、台湾内部で急速にこの島への注目が集まる。これは沖縄側、日本側でも同様であるが、台湾側からの文書からは、特に経済部が積極的に主権や経済利益の獲得を主張し、次第に蒋介石をはじめとする指導者が、それに引きずられていく様が指摘されるだろう。だが、留意すべきは1970年から71年にかけて、台湾側は主権を主張するものの、重点は経済利権に置かれており、実際には日米台韓で東シナ海の共同開発の目処がたっていたのである。ところが、1971年、この共同開発計画が急に頓挫してしまうのである。中華民国の国連脱退、キッシンジャーの電撃訪中、翌年に予定された沖縄返還など、いろいろな要素がその背景にあるであろうが、この島をめぐる問題はこのような大きな背景があることを、外交文書という根拠に裏打ちされた歴史過程とともに示すことができた本研究は、内外の学界に対して斬新な試みとなる。

## 5. 主な発表論文等

(雑誌論文)(計9件)

川島真「中国の海洋戦略と日米同盟」世界平和研究所編、北岡伸一・久保文明監修『希望の日米同盟 アジア太平洋の海洋安全保障』講談社、2016年、119~139頁、査読有  
川島真「『帝国』としての中国 20世紀における冊封・朝貢認識と『中国』の境界」宇山智彦編著『ユーラシア近代帝国と現代世界』ミネルヴァ書房、2016年、219~236頁、査読有

川島真「中華民國外交檔案所見の日華断交—以椎名悦三郎訪台前提条件为中心」黄自進『日本政府的兩岸政策』中央研究院人文社会科学研究中心・亞太区域研究專題中心、2015年、295~329頁、査読有

川島真「メディア・歴史認識・国民感情」川島真編著『チャイナ・リスク』岩波書店、2015年、285~307頁、査読無

川島真「問題としての中国」遠藤誠治・遠藤乾責任編集『安全保障とは何か』岩波書店、2014年、147~176頁、査読有

川島真「対立と協調—異なる道を行く日中両国」北岡伸一・歩兵編著『日中歴史共同研究』報告書』勉誠出版、2014年、85~122頁、査読有

KAWASHIMA Shin “Sino-Japanese Controversies Over the Textbook Problem and the League of Nations,” in Herren, Madeleine ed., *Networking the International System : Global Histories of International Organizations*, Springer, 2014, pp.91-106、査読有

川島真「第1章 東アジアの近代—19世紀」和田春樹・後藤乾一・木畑洋一・山室信一・趙景達・中野聡・川島真『東アジア近現代通

史—19世紀から現在まで』上、岩波書店、2014年、1～50頁、査読有

川島真「尖閣諸島問題の形成過程—日中国交正常化以前」『IIPS Quarterly』5-2, 2014年、4～5頁、査読無

〔学会発表〕(計12件)

KAWASHIMA Shin, “The Image of World Order in Modern China: the Tribute Relations in Memory”, International workshop Representations of China in a Changing World Order, 1915-1949: New Research Perspectives in Italy and Japan, 2016年3月17日、ヴェネチア・Ca’ Foscari University (イタリア)

川島真「尖閣諸島問題の外交史的検討」、第四回東シナ海問題研究会、東京財団、2016年2月25日、湘南国際村(神奈川県横須賀市)

川島真「“二戦後日華/日台関係の展開と展望”(第二次大戦後の日華/日中関係の展開と展望)」、APF 臺北論壇/日台フォーラム、2015年11月5日、エクセルホテル東急(東京都・渋谷区)

KAWASHIMA Shin “The Memory and Legacy of the Tribute System in Twentieth-Century China”, Session “The Coastal and the Continental: Qing Frontiers and Foreign Relations in Modern China”, Sponsored by Historical Society for Twentieth Century China (HSTCC), Association for Asian Studies 2015 Annual Conference, 2015年3月28日、シカゴ・シェラトンホテル(アメリカ)

川島真「東アジアの過去・現在・未来」基調講演、韓国日本学会、2015年2月7日、ソウル・東国大学(韓国)

川島真「中華国外交档案から見る尖閣諸島問題の形成」、日台有識者セミナー、2015年2月5日、東京大学駒場キャンパス(東京都・目黒区)

川島真「日中・日台関係と東アジア情勢」日台フォーラム 2014 台北会議、2014年11月21日、(公財)世界平和研究所・遠景基金会共催、台北・六福皇宮(台湾)

川島真「1970-80年代中華民国對外宣傳—以國際新聞片為主的初步探討」、「影像與史料: 影像中的近代中國」國際學術研討會、2014年10月12日、台北・国立政治大学(台湾)

KAWASHIMA Shin “Deimperialization in Early Postwar Japan: The Adjustment and Transformation of Institutions of ‘Empire’” (戦後初期日本における“脱帝国”化—『帝国』諸制度の調整と変容—) “Breakdown of the Japanese Empire and the Search for Legitimacy”, 2014年9月20～23日、ケンブリッジ・Cambridge University(イギリス)

KAWASHIMA Shin “What’s the will of people in Japan?—the Public Opinion and Domestic/Foreign policy—”, Session One:

Asia Strategy and Domestic Considerations in Each Country, Moderator: Christopher Johnson, at U.S.-Japan-China Trilateral Dialogue 2014, 2014年9月8～9日、ワシントンDC・Center for Strategic and International Studies (アメリカ)

川島真「国家と民間/政治と経済—東亞國際政治的界限と可能性」中国力主催、2014年5月25日、南京・南京大学政府管理学院(中国)

川島真「尖閣列島/釣魚台列嶼問題の形成過程—從19世紀末到1970年代初」、「多元視野下的釣魚問題新論」2014年4月17～18日、台北・中央研究院近代史研究所(台湾)

〔図書〕(計5件)

家近亮子・川島真編著『東アジアの政治社会と國際關係』放送大学教育振興会、2016年、298頁

川島真編著『チャイナ・リスク』(シリーズ日本の安全保障5) 岩波書店、2015年、307頁

川島真編著『近代中国をめぐる國際政治』中央公論新社、2014年、274頁

和田春樹・後藤乾一・木畑洋一・山室信一・趙景達・中野聡・川島真『東アジア近現代通史—19世紀から現在まで』下、岩波書店、2014年、256頁

和田春樹・後藤乾一・木畑洋一・山室信一・趙景達・中野聡・川島真『東アジア近現代通史—19世紀から現在まで』上、岩波書店、2014年、244頁

〔その他〕

ホームページ等

川島真研究室

<http://www.kawashimashin.com/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

川島 真 (KAWASHIMA, Shin)

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号: 90301861